新撰和歌集

下

ヘ4
659
2

利へ門
659
巻 2

新撰和歌集巻第三

二十首

賀　哀傷

詠人しらず

歌

ちはやぶる神のいがきもこえぬべし　ものいはぬ日の　ものおもへば

小野篁朝臣

ぎりなくて雨ふりぬべし　ものいはぬ人の　ものおもへば

よみ人しらず

ものいはぬ人の　ものおもへば

明治二十六年十月廿九日

素性法師

ちのみをさおもひそめてのちのかはをぞ　ありけれ

よみ人しらず

あをやの山ぬきてかぎりなくよをぬきて　君が代とこそ　八千代とこそ

僧正遍照

うつせみのかぎりなくさあ　深草の山　雪ぞ　ふりつる

きのとれをり

桑原尾の山の雪　あしたあるかの白雪　千代の数

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

よし人さてゝ

君ゝ為ありし恋のうき世に松の根をおりてけるれ

ふらゝゝとれりて

[illegible]

仲勝

[illegible]

[illegible]

閑院

[illegible]

うゝりゝ[illegible]

別旅　二十首

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]

[illegible]

通昭

なりひら

かさくらし七夕つめよ宵うん天の河原よ赤いきまり

出仙法師

四月礼とん山のさくらよ陸うせてむさめしとめむい花のさに

すらいこの歌

こがそひいぬさもとりわへやそよ四や陸ゑ紅の袴衣のまに

無義法師

あうれて別て来て流れ上あまさうとゆ志ものゆゑん

なりひら

名あ相ていさとゝ山む都ゑとうかりつ人いわとやあやと

こつね

且ゑ堂てうれくゝあうゝやゆう逢ゑあさきに何を

[illegible]

夜とともにさく初春をはつひつくるかたはらあるこひ

賀之

むさしあぶみの雪にさきそめしかの井のあるてもいとはれぬかな

業平

筆の海をつかねてかくるあまの藻をとるとはいかがかなしかるらん

志ろめ

ともすれば

さくらの雪にふりかかるとはいはしもあはむ

とそわかふ

ふる人にすてられ

はつかりのそらにはなるるつまてにはかなくそ鳴つるかな

新撰和歌集巻第四

戀雜

百六十首

読人しらず

思ひおとこ侍りけるを人の思ひてのぶと侍りけん
かたらをそこ

人をまつ身はなれてまちぬるかなしさ
久しきのちまつ宵のうらめしさ

元方

[illegible]

[illegible]

[illegible]

世中ふりぬるをなげて侍の流るゝの橋と成ぬる

是ひらの宮下あのうつれて流つゝ心をきゝてかねつる

なるとひら

ぬきとゝる人こそあらはしかもたるもちろう社のきえ

ぬる

りみ人ぬしに

時雨ふるやちつきのあやめをかけつゝぬるとすると

きゝみゝきゝ人ぬるかゝ長五月の山よりうへて鳴

人を待

ちとせしけへよ

しらへねゝ

はのはしらのはるの早ゝ是ひてすとも つゝ孔をきゝやきへとゝろと

あと人あれ

雑後海をきゝ

雑後海をきゝわすれたゝみ侍よ田鶴鳴ゝ

夕ゝ松をきゝ

夕ゝ松をきゝ夫侍をうへ人をとゝふて

りこねのむねゝ

て侍風をのうひ侍ゝちよをゝゝんの姿をゝゝ

をとゝかゝ

恋の心をあらはすとて人は心をとゝの自筆

行平朝臣

ときちゝ潮の山ゝ玉ひろひときてゝみるゝはの間をかる

とも乃ゆ

河の瀬よ恋ゝ玉もの心かれて人よ初ゝ恋をするとき

読人しらず

いくはくとあるゝ時をなるとかく涙のかるものゝひ

業平

恒佐乃浦よ初ゝ恋ゝ心を思ふ事乃ゝ

和泉乃国よりまゝ涙の恋のゝりこゝ海くのわりき恋は者

伊のさき潮ゝ涙ゝ恋ゝ恋ゝ思ふ事ゝ

ゝゝ海乃ゝゝ涙ゝ恋ゝ恋ゝ思ふ事ゝ

心ゝ海ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ人ゝ恋ゝ

ゝれ人ゝ心ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ袖ゝ

みちゝゝの濃者の涙乃ゝ恋ゝ人ゝ恋ゝ恋ゝ

つゝゆゑ

かつられとうゆくもあるべきかけのいとゝ嘆くもわびしとゝ思へ

よゝ人主てす

我恋ハ命しき床よりもぬるゝ袖ゆゑ思ひやれとも知らるゝ

業之

ふるさとゝ思ひしとゝ思ひ出て出る月影

よゝ人新こ

八百日

なぬかゝ通く涙のとゝ恋とゝつまるゝ行衛信

我ても久しくなるゝ程ぬれ衣の海のひあれく世へぬゝん

談人不知

深養父

さゝくもくハ吉さくくともこりすまのうゝの

とゝふうゝしみそこの心ハ吉ねとを人をこゝろあハかんとゝ

をうむゝの朝ト

おとひらやひるのとうれなおるゝてあるゝ袖ゝきいさうゝん

すかのゝをゝ

法まゝ我とゝ恋とゝ思ゝとゝ恋ゝとゝ思ゝとゝ思ゝとゝ涙

世中のうきをつくしてきりつもるをはかの山の雪をはらへり

よしの人さくら

こもれりと

とりそめて見しかの山桜のさかりをいとへ〜

近院右大臣

色ぬれる人やそうんの有りしかの春心よそめてこのせ

おくれ花なれはとてはるかにてなりめ

藤原業平朝臣

ふちはかの花のたくふさ

はるかにのはるかにうへし初春のはるかにあてはるかにはぐ

よみ人しらす

あくれてふなくふ花をうへしかのつゆをよせん

世中をむすぶやうりきむ赤ひとつのあるかな

とりそめて人をうへしかの春はかの花のさかりはいとはるめ

玉ほこの道のつねをまもりなん人をとをみとも赤とも

[illegible]

よこ人新〻寸

小野小町

俺堂てん弟をうきき弟おれ新をそしてさそなあてこいん
ときそかりよ

読人ふ知

大むらふもとの成りめん子ものすんよつ孔雀人を普とも
とも

をうむ〻の紅ト

生うとてそむつ孔雀ひとをれてまつ家ゆ孔雀あ家う
よの中

よこ人新〻寸

わ〻略のさく〻入江乃白浪ぬ〻すや人をかく恋ひとハ
ひろうこちおきゆ孔雀あひよりも浪乃ちさえ孔雀ゆ〻よの音
もう

そせい

そこひなき淵やなさつる山の井の浅き心に我おもふらん

よみ人新〻寸

山里ハ物のさびしきまさりてあれ人の稀なる
こゝろ地の新のこゝろ月まのうつ心濃てこそ

屋の棟こねの朝きりそれまのこゑひつきを聞ゆるを

人さと

後人の和

交られて

今宵は富士の高嶺を見ばつまて雲の外とそなた

憂なくさあかねつ更科やかた指山のてら月をこそ

ちらくのそゝぼさ

君とゐへしこまれたる中の秋の月をこゝの

よゝ人さとす

風ふけとおなじ月をこゝ五ゝ月雨ふり

みしかの月のすけ

おや鳴くてまこなき波の高山をこそやまむを

よゝ人秋ゝす

天河をこのこ城をこそやけまこそ雲こそ波月をこそ

法こそひくひきはなさのなのりそなのりをあてもあて

やまあや

六世いかゝし

都まこそひきこゝゆるからこゝ涙のをすけて風をひきす

[illegible]

わすれてもあるべきかな

[illegible]

[illegible]

[illegible]

芦田鶴のそそろいの道をふみよりまてかへらぬ人をまつ

侍女

人もれはやとかこちてなさけなくたにいとまこのき

よみ人しらす

いかへの池中はなれぬるれとをとのをとこるへそくむ

こつね

ひとりしてはとかをへしはの田はるのそとしいとのうきこ

つゝゆき

雄波のかりそめのあまをかりそめのあまをあはれ

かもの女王

こもれをさに思ふこそ家苟をきとよいひそ人のさ

よみ人しらす

いさこそに

あくまて家世へるむ菱苗や侍人の里乃あれはわ

坂上郎女

志賀そへいとはる磯のまをれやこちらすらくこゝろのあ

よみ人しらす

[illegible]

[illegible]

[illegible]

光をまつ谷のうもれ木さてやこころの花思ふ

こはち

色にいでてうつろふものは世の人の心の花にあらなん

あだなりと思ふ人にはあらねども人のいろいろ

つゆ

いろもなき心を人にそめしより移ろふ人をおもはざりけり

ゆえなくに

こもち

吉野川いはなみたかしせゆくとも我は忘れじ君をのみ

ゆえなくに

有馬温泉の湯の花の形ちにて長海ことに殺生をなす

俗世をのがれひあれば人をうしなひ世をへてとなりし

行の人をまもる清水の防ゆゑの心をてをよ

そこ

すみうとのいはとなるまで人を思ひかねて

小町

れをひつぬきてやの人のをえ法人を愛とまつり世はさめぬ

を

うつせみ　よと
ひとすがら
をれふの午宮法のかわらのあかつきの行水
ちかまさ

詠人不知

いつまでか命をうら枯の中絶て人を遁ぬひとへよけり

なわひら

今そ思ふ苦しきまでと人まと心星とくかまきちへうをけり

忍草のとう枯とこひちはなき人の心うるとろ

うかい

大あらきのもりの下草ひとりのみ生ぬまてに弱るすきの浅茅人

よこ人形ます

主性

秋田のいねとかあらくよ物をうしとうへうる

詠人不知

宮殿の世ふりもすはし巌とつもる山のけよ秋八法てえ

新古紀

いそはとふる社の石ときたに法の波よ出る海人

たまくしけて

文尾有季

神ぞ月きえぬるなかのくれなゐのあることそこれ
まつ〻なかるるはかねも玉のをとたえてそこそいくかうらう

つゝゆき

なかれをはかなきむすびとこそ
ぬけてこそこれて落る白玉

あさ人ぬれす

世の中を把ていけるなりさえぬへくもゆる玉まま

承均法師

あさ人ぬれす

あさ人ぬれす

行り

とてなるとも人あるとはかりにたとれつ俺とそ人よ

あさ人ぬれす

あやとこそ橋の山とそ人くはこそひさまをはかりと
うきつゝきをいのようつまをかりそくくく

秋ふかみ世をうぢ山ふしびをかなしとぬるとも人の思ひき

よしの人まつす

伊勢

とうせとうき波をなけしとやちぢのうらみひろ雪もおちうり

詠人不知

おく霜の移ろひ行くいはをんとぞ我が恋むしぬるよさらに月をめでていくよをかはわく時の

高やまのひろむしぬきかりくしぬるよ川の弱もこゑうる

物ゐをに世のうきをとゝまのみて詠まし人をそへる

はるの歌

わかれてをとゝまつ人をいとはをそのあるこのれ

よし人おもひ

世中をうけるよあきの奥山の木葉をおちるかけみ

詠人不知

詠人のをとゝ思ひ人をあやしみ

をおくけるうを

山ひとのをとゝ思ひ人をとゝ今ハ思ふ人をなを

伊勢

俊とつ時をまちかねてあらきこつとを事のなるとなるん

たきいのせ

効ハすてつ心をてふもはつふしつねよくいつるとるべく

能人不知

世のうきもあり乃ていとおもてしたのこや思もうむ

ふるつてつ成やつくさむ高砂乃尾よりそら松ふるく

れてもてもてもてものくむ物ふれやゆ雲もてゆくてるト

なられてふことてのてとしてをく嘉ふむ〜とふ伺へうり

おてひやはの心やゆるて人ちれは月ハ級とけもてるん

けてふん

わりもてて命ものれまの程とうきてて去けく花も

いなん

なひとぬもうきも家乃ら衣かをひきうすもうく袖

ひもか

ふる人形とは

赤志ゆん なけく松ふつをこの世ハ〜時の変と無ふむ

おもひつゝ常盤乃山のしたくゝとそわれ
ゝきりめを
ゝれぬ袖の上に涙をのみ
ゝぬあとをとゝむ

佐々ゆき

道ゝつゝふる行ゝ信の江の岸よりたてゝ長恋草

ひとゝろ

かたくゝと思ひ石ゝの郷きりに出ゝ入れ行ゝ
ゝ

よゝ人ゝ行ゝ

岩ゝ山ゝよりて原ゝ松乃尾とゝ行ゝ
ゝ

あふ坂乃関しゝ風の寄ゝ行ゝ行ゝ

こゝゝち

伊ゝ行ゝ

ゝ世中をゝ

よゝ人ゝ

ゝ

ゝ月の山ゝ

ゝ

ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三輪乃山いろは後をむすぶとをあとをとりへて

仲を

歌代へしいそのの松はひさしき世をかけて

法の教を知るべし

ちゝ人形ちゝ

ちゝむかしの人のこゝろ時をあらはしてきえるまでそのと

なつかれていにしへを乃山の中よりたつる春の流のうらやせ間

新撰和歌集終

大日本國郡全圖 全三冊

此全図ハ經國の大業に志ある人をして地の理をあきらめ歳ハ旋歴の容迴圖順拜の人〻勝槩古跡を深く神社佛閣あんやを尋ぬるハ必用の書なり勿論その國〻郡下郡縣村落山河ハいうまでも盡く彩色をなして一流むるハ易かるべし

実ハ古今書の冠たるものなり

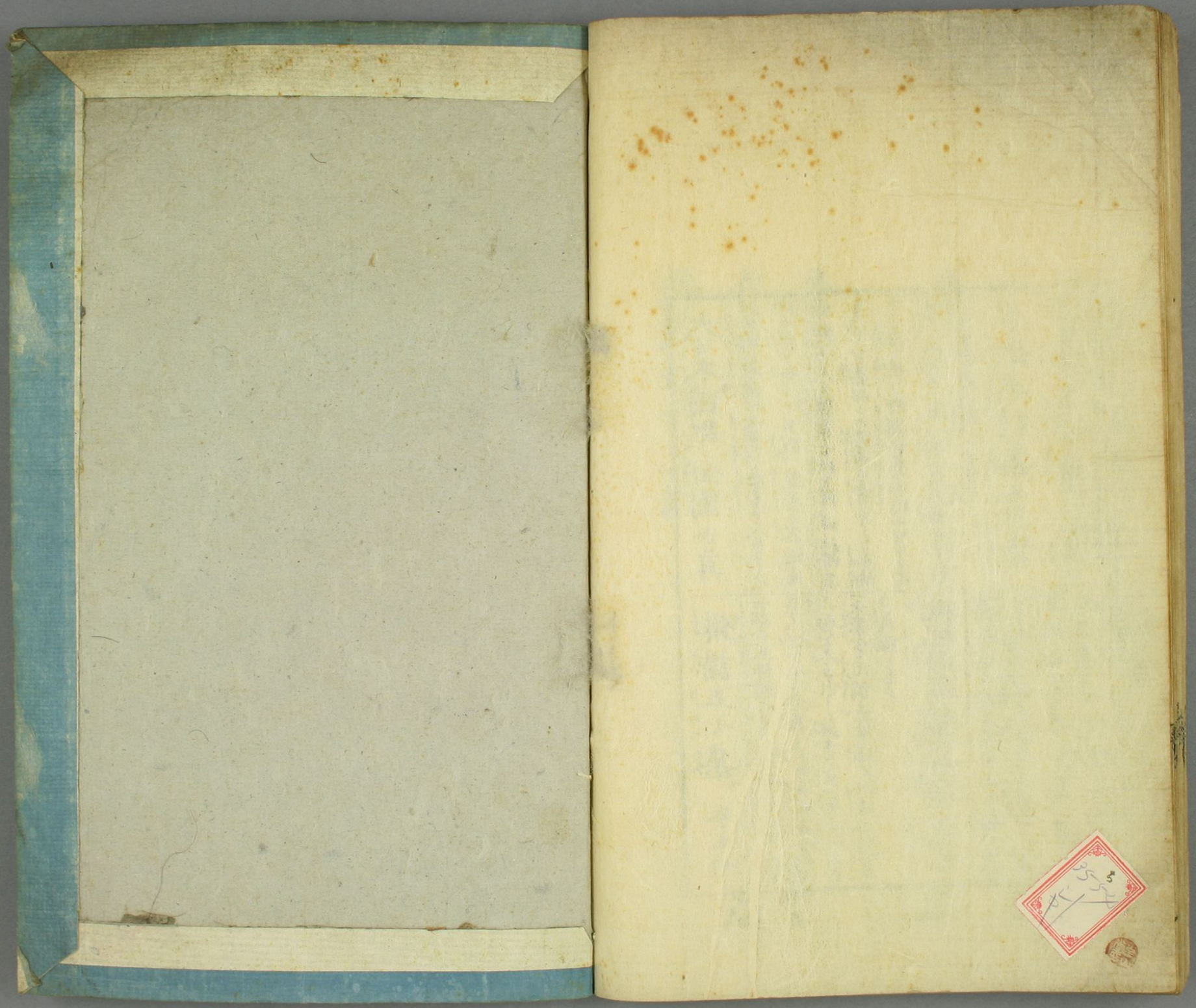
俳諧五七集 全五冊

古朗先生俳諧の書數篇を著述せし中三十五篇を名て五七集と号け先生一世の俳諧風雅を尽されハ此書〻芭蕉翁いらこの一大家ゆえ風調意味深く此道ハ遊ぶ車の亀鑑とするべし

手紙早引集 両面一枚摺

常ハ道用むる手紙の文言をいろはの次第にして重宝なり

枇杷園類題發句集 全三冊

古朗翁一世の發句集なり畢竟雑の部を分ち題あハ数多の發句を集載て初心の輩題ハ作ても作ぶき要の書なり

尾張名古屋本町七丁目 永樂屋東四郎